

誘惑されたアイスドール

目次

誘惑されたアイスドール

5

愛しのアイスドール

267

誘惑されたアイドル

日は沈み、辺りは薄闇に包まれている。秋が深まっていくにつれて、どんどん日が短くなってきたのだ。森谷優希はタクシーを降りると、開かれている背の高い鉄製の門扉に目をやった。

ここは萩原邸——萩原建設という会社の会長の家だ。住宅地としては一等地であるうえ、敷地は広く、もちろん目の前の家は豪邸だった。モダンな造りの三階建てで、庭にはプールがあり、地下に広いホールがあるという。

優希は地味な紺のスーツを身に着けている。艶やかな髪は腰に届くくらいに長い、後ろでひとつに束ねていた。今からこの豪邸ではパーティーが開かれる。しかし、自分はその招待客ではない。優希はパーティーに派遣されるコンパニオンだった。客に飲み物をサービスし、料理を取り分け、楽しませるのが仕事だ。

門扉の傍に立っている二人のガードマンに、優希は自分の身分証を見せた。二人に怪訝そうな顔をされた理由はわかる。自分の服装はコンパニオンという一見、派手な職業には地味すぎるからだ。とはいえ、ガードマンに追い出されることなく、敷地内に入ることが許されて、邸内へ向かう。

「遅かったじゃないの、優希」

玄関ホールにいた友人の木元理沙子が声をかけてきた。彼女はチャイナドレスに身を包んでいる。今夜はこれが制服というわけだ。

「仕事に手間取ってしまつて」

「昼の仕事との両立は難しいんじゃないの？」

「ううん。今日はたまたまよ。社長のありがたい話をずっと聞かされていただけだから」

優希の昼間の仕事は、小さな会社の事務員なのだ。本来の事務だけでなく、雑用をすべて引き受けなければならぬが、小さな会社だけに時間の融通は利く。優希の副業は週に一回くらいなので、認められているのだ。ただし、雑談好きな社長の餌食にならなければの話だ。

「こつちよ。みんな、用意ができてるのよ」

優希は派遣されたコンパニオン達にあてがわれた部屋で、チャイナドレスに着替えた。丈は足首までであるが、スリットは膝より上まで入っている。歩く度に、ちらちらと太腿が見える。このパーティーにはきつと男性客が多いのだろう。

パーティーによつては、着物を着ることを要求されることもあり、メイド喫茶のメイドのような格好をすることもある。今日はチャイナドレスというわけだ。優希は手早く髪をセットし、メイクを仕上げた。週一回の仕事でも、優希にとっては、大事な仕事だ。手抜きなんかするつもりはなかった。

瞬間に、優希は地味な事務員から、華やかなコンパニオンとなった。鏡の中の自分はなかなかの美人に仕上がっている。ドレスと化粧のせいかもしれない。普段の自

分はそれほど人の目を惹くような容姿ではないからだ。髪は清潔感が出るように、アップにしている。長く垂らしていると、年配の客には不評なのだ。

実年齢は二十二歳だが、今の自分もつと年上に見える。二十五歳以上だ。

「いつものごとく、化けたわね」

理沙子が感心したように優希の姿をじろじろと眺めた。

「普段のわたしを知ってる人が見ても、わたしだとわからないと思うわ」

それくらい印象が違う。私生活では、Tシャツとジーンズを着ることが多い。たまに、チュニツクにトレンカやレギンスという格好もするが、華やかなドレスを着ることはまったくない。

「優希って、スタイルいいから……。今日もお客様の目を釘付けにするわね」

確かに優希はスタイルを褒められることが多い。細身なのに、出る場所はしっかり出ている。背はそれほど高くないが、姿勢がいいせいか、目立ってしまうのだ。

優希自身は、誰の目も惹きたくなかった。できれば、誰にも気づかれずに、会場の隅っこにいたいくらいだ。けれども、コンパニオンが隠れているわけにはいかない。接客することが仕事なのだ。本当はパーティーなど好きではないのだ。だが、楽しいわけでもないのに、接客は上手くできてしまう。本心を隠すのが上手だからかもしれない。どんな悩みがあろうと、どんなに相手が嫌な客であろうとも、顔には出さずにこにこと笑って、会話をすることができた。

「ねえ、優希。この前の仕事で、男の客に名刺をたくさんもらったでしょう？ メールくらいしてあげた？」

優希は肩をすくめた。

「お客様と個人的なお付き合いはしないわよ」

キャバクラのような店に出ているなら、知り合った客と連絡を取り合うことは大切だろうが、派遣されるコンパニオンの場合は、特に必要ではない。会社から連絡が来て、自分の都合が合えば、現場に向かうだけだ。

優希にしてみれば、なぜ、客とメールなどしなければならぬのか、理由がさっぱりわからない。しかし、理沙子はまだその話を続けていた。

「でも、この間のパーティーに出席していたのは、エリートばかりよ。付き合ったら、いろいろ買ってもらえたり、豪華なディナーに連れていってもらったり……。優希くらい綺麗な女の子なら、ひよっとしたら結婚ってことも考えられるでしょ」

「まさか！ エリートがわたし達と遊ぶことはあるかもしれないけど、結婚はないわよ。結局、弄ばれて終わりなんじゃないの？」

真面目な男性中にはいるだろうが、優希はそんなことは当てにしないことにしている。仕事は仕事だ。そう割り切るほうがいい。それに、パーティーで知り合った中で、プライベートで付き合いたいと思った男性は、今までいなかった。

「優希ってば……。だから、アイスドールって呼ばれるのよ」

コンパニオン仲間から、そんなふうと呼ばれていることは知っている。客には笑顔を見せても、本心は決して明かさないからだ。誘いをかけられても、一度も応じたことはない。

つまり、氷のように冷たい女というわけだ。

「そこまで冷たいつもりじゃないけど」

「男には冷たいでしょう？ 男に裏切られたとか、そういうことがあったの？」

「いいえ、別に」

男性に裏切られるどころか、今まで付き合ったことすらない。好きな相手でなければ、付き合う意味がないと思うのだ。

それとも、考え方が他人とは違うのだろうか。他の女の子は大して好きでもない相手と、付き合ったりするのもかもしれない。

でも、わたしは嫌だわ。

頑なな性格かもしれないが、優希は自分の主義を通したかった。夜の仕事をしているからこそ、生き方に一点の曇りも許すつもりはなかった。もともと、こんなふうに分身の殻にしがみつくのは、馬鹿馬鹿しいことかもしれないとは思っている。

優希の父は大きな会社を経営していた。父は気前よく金を使い、女性を何人も愛人にして、王様のように暮らしていた。ところが、そんな生活で身体を壊してしまい、優希が十五歳のときに亡くなった。

それから、父の会社の経営も悪化しはじめ、間もなく倒産した。そして、残された財産は、母と五つ年上の兄があつと言う間に使ってしまったのだ。

母は金遣いが荒かった。子供の世話は家政婦に任せて、いつも出かけてばかりいた。父の女遊び

が激しくて、ブランドもので着飾ることでプライドを保っていたのかもしれない。だが、父が亡くなった後も、その癖は変わらなかった。

兄もまた父の財産に頼りきりの生活を送っていた。大学を卒業しても仕事に就かず、派手に遊んでいた。仕事をしようとしたときもあつたが、地道に会社で働こうとせず、繁盛しない店を買って、オーナーになってみたり、友人と会社を興したりしていた。どれも失敗しようだが。

ろくに収入がないのに、湯水のようにお金を使えば、どんな財産でもなくなるに決まっている。この荻原邸のような豪邸と土地を手放し、狭い公営アパートに引っ越すことになったとき、母は医者からもらった睡眠薬を多量に服用して、自殺未遂の騒動を起こした。

当時、優希はまだ高校生だったが、母も兄も頼りにならないと、このとき、はつきりとわかった。兄は恋人のところに転がり込み、まるでヒモのような生活をしていて、母が入院したことを連絡したときも、顔を出さなかった。母は泣いて、愚痴を言うばかりで、これからどうして生活していくのか、責任ある親としての考えを持っていなかった。

結局、優希は高校を中退して働き始めた。今、働いている小さな会社の社長は遠い親戚だ。あの頃、優希は母と食べていくために必死だった。だから、なんとか頼み込んで、雇ってもらったのだ。はじめは雑用ばかりだったが、それでも懸命に働いて、やがて事務の仕事覚えた。

一方、兄はたくさんの恋人の間を渡り歩いた。仕事しても、続かなかつた。そして、二年くらい前に、ふらりと行方をくらませた。今はどこに居るのかわからない。母は優希と暮らしているが、不平ばかり言っている。一番の不満は優希の給料が少ないことだ。社長が親戚だからといって、そ

れに甘えるわけにはいかないといい聞かせても、なかなか理解できない。高校時代の友人である理沙子に誘われて、コンパニオンの仕事を始めることになったのは、そういう理由からだった。

夜の仕事というのは、やはり誘惑が多いもので、優希は今まで何人もの男性に声をかけられた。仕事として、笑顔を見せ、会話をしているだけなのだが、勘違いされることもあるのだ。理沙子の言うとおり、それを利用して、高額のプレゼントをもらっている仲間もいる。しかし、優希には無理だった。

父親も兄も、女性にはだらしなかった。あの自堕落な二人をずっと見てきた優希は、少女の頃から男性には幻滅しか感じない。もちろん、格好いい男性を見れば、惹かれることもある。けれども、それが恋愛に発展することはなかった。

そもそも、恋する気持ちは、優希にはわからなかった。今まで一度も男性に夢中になったことなどない。そんなところが、アイスドールと呼ばれる所以なのかもしれない。

「ねえ、理沙子。わたしはこれでいいのよ。手にかかる母もいることだし、今は働くことしか興味はないの。できれば、手に職をつけたいわ。お金を貯めて、学校に行くの」

そのためにも、コンパニオンの仕事を頑張らなければいけない。改めてそう話す優希に、理沙子は大げさに溜息をついた。

「お母さんにも働いてもらえばいいのよ。自分の食い扶持は自分で稼げてね」

「そんなことを言ったら、一週間は愚痴を言われっぱなしになるわ。ぞっとするわね」

それくらいなら、自分が働いたほうがいいのだ。母は不平を言いながらも、一応、家事をしてく

れる。洗濯と簡単な料理をするくらいで、買い物や掃除や雑用はすべて押しつけられるが、それだけで優希は満足だった。

「たまには、羽目を外せばいいのに。アイスドールは返上して」

優希は微笑みながら、首を横に振った。

「いいのよ、今のところはそれで」

一生このままの生活を送るとしたら、とてもつらくなるが、いつかは信頼できる男性に出会えるかもしれない。年を取れば、そのうちこの頑なな考えも消えるかもしれない。

そう……いつかは結婚して、子供を二人くらい欲しいわ。

優希は自分が生まれ育った豪邸のことを思い出していた。あんな裕福な暮らしを求めているわけではない。自分が育ってきた家庭は空虚なものだったから、愛情のある家庭が欲しい。優希が欲しいものは温かみのある家族だけだった。

いつかはきつと、わたしの欲しいものが見つかるわ。  
けれども、今は漠然とそんなふうに願うだけだった。

パーティーの間、優希は営業用の微笑を浮かべながら、明るい調子で客と会話していた。

地下にあるホールはかなりの広さで、ここでパーティーを開くために作られたものらしかった。

優希は屋敷内部の階段からホールに入ったが、庭のほうからも直接入れるようになっていた。ケータリングのスタッフが料理もできるように、設備の整った厨房もあった。

集まった客は五十人以上いるだろうか。対して、コンパニオンは十人いる。

このパーティーは荻原会長の息子の誕生パーティーだった。彼は三十二歳で、父親の会社で働いている。この年齢と立場を考えたら、まず平社員ではないだろう。コンパニオン全員で彼に挨拶をしたが、なかなかスマートで格好いい男だった。優希は興味なかったが、理沙子は早くも熱を上げていた。彼女はわりと惚れっぽいのだ。

今日のパーティーには荻原建設の関係者もいるらしいが、荻原の友人も多く参加していて、あまり気取ったパーティーではなかった。

派遣されるパーティーによって、コンパニオンは接客の仕方を変えなくてはならない。会社関係のパーティーでは礼儀正しさが重要になるが、内輪のくだけたパーティーでは盛り上げることも大切になってくる。今日のパーティーはその中間といったところだろうか。照明は暗めで、ホールの隅にあるグラランドピアノで、ドレスを着た女性がジャズを奏でている。賑やかだが、決して下品な盛り上がりではない。

客に頼まれ、優希はカウンターに行き、ウイスキーの水割りを作った。それをホールの中央に配置されているソファで寛ぐ客のもとに持つていこうとしていたが、立ち話に夢中になっている客を避けようとして、別の男性客にぶつかってしまった。

ピンヒールを履いていた優希はよろめき、ぶつかった男性客のスーツに水割りがかかった。

優希はざっと顔色を変えた。とんでもないことをしてしまった。客の中には、とんでもなくプライドが高い人がいる。同じような失敗で、酔っぱらった客にしつこく絡まれたことがあった。許してやる代わりに、一晩付き合えと言われたことだってあるのだ。

「申し訳ありませんっ……!! お怪我はありませんか?」  
優希は手近にあったナプキンで彼の高価そうなスーツの袖を拭いたが、グレーのスーツでは濡れた跡がはつきりわかるし、このままだと染みになるかもしれない。ここに招かれた客にこんな粗相をしてしまうなんて、主催者に文句を言われるかもしれない。

「怪我はないかって? そう言う君のほうに怪我はないかな? 足首をひねったりしていないか?」  
優しくそう言われて、優希は目を上げた。そこにいるのはすらっとした長身の男性で、スーツがよく似合っている。顔立ちは男らしく整っていて、心配そうな目つきで優希をじっと見つめていた。一瞬、優希は答えられなかった。

声が出なかったのだ。誰かを見て、こんなに衝撃を受けたことはない。しかも、初めて会った人なのに。

自分でもよくわからないが、身体の芯がカッと熱くなってきた。ほんの数秒のことだったかもしれないが、優希はそのまま彼の顔に見とれてしまっていた。

なんて素敵な人……

整っている顔立ちのせいだけでなく、彼の発している雰囲気惹きつけられる。この場を支配するような強いオーラの持ち主だ。しかも、コンパニオンにぶつかって、スーツを汚されたのに、怒るところか、こちらを気遣ってくれるなんて、優しい人に違いない。

「……どこか具合が悪いとか?」



彼に怪訝けげんそうな顔をされてしまった。優希は自分がぼんやり彼に見とれていたことに気づき、我に返った。

「いいえ。あの……なんともないです。それより、本当に申し訳ありません。後で必ずクリーニング代をお支払い致しますから。よかつたら、お名前と連絡先を教えてくださいませんか？」

そう言った途端とたん、彼は急に口元を引き締めた。目つきも鋭くなり、こちらを疑うような眼差しまなざしに、優希は戸惑った。

優しい人だと思っただのに、今はそんなふうに思えない。彼はどうしてこんな顔をしているのだろうか。本当はクリーニング代を払う気などなくせにと思われたのだろうか。今は仕事だから、お金が手元にないだけの話なのだが。

「あの、連絡先を……」

「僕はこういう手には引つかからないんだ。コンパニオンに連絡先を教えたりしない」

優希が彼に誘いをかけているように思われたらしい。優希はそんなふうを受け取られるとは思ってもみなかった。驚くしかなかった。彼はよほど女性にもてるのだろう。こんなふう誘われることが、今まで何度もあったに違いない。

そうでなければ、彼がものすごく自惚うぬぼれているか、だわ。

だが、彼の容姿なら、自分と同じように一目で惹かれて、連絡先を教えたらおうとするコンパニオンがいてもおかしくない。彼はそういう女性の誘いを軽蔑けいべつしているようだった。

「そうじゃないんです。スーツを汚したお詫わびがしたいと思っただけです」

彼は見下した目つきで優希を見ると、肩をすくめた。

「スーツのクリーニング代なんて、わざわざ払ってもらわなくてもいい。君は自分の仕事をきちんとかねせばいいだけだ」

優希はこれ以上、彼になにを言っても同じだと思っただ。ただ、コンパニオンが男性を誘うためにこういう仕事をしていると思われるのは心外なので、無駄だとわかっていても、一言添えた。

「ええ、もちろん、わたしは自分の仕事をきちんとするつもりです。では、失礼します」

控えめに微笑ほほえんで、頭を下げると、彼に背を向けた。とても格好いい人だと思っただが、見かけだけだったということだ。いくらなんでも、ああいう言い方はないだろう。彼はコンパニオンに偏見へんけんがあるのかもしれない。確かに男性にデートに誘われて、その場で連絡先をもらったりすることも多いが、全員がそうしているわけではない。それに、連絡先をもらったとしても、実際、デートするかどうかはわからないのだ。

優希だって、断つても名刺を押しつけられたことは何度もある。そして、その名刺にはプライバシートナ電話番号が添えてあるものなのだ。だが、連絡したことなど一度もない。

いずれにしても、彼の顔は二度と見たくない。酔っぱらった客からセクハラまがいのことをされたことはあっても、こんなふう侮辱むじやくされたことはなかった。

恋心みたいなものがやっと自分にも芽生えたかと思っただのに、一瞬でその気持ちは消えてしまった。どうせときめくなら、もっと優しそうな人にすればよかった。鷹のような鋭い眼差しの持ち主なんて、見かけだけの優しさしか持ち合わせてないに違いない。

しかし、忘れようとしても、なかなか忘れられない。同じこのホールにいるのだから、尚更だつた。どこかに彼がいると思うと、妙に意識してしまう。なんの関係もない人なのに、どうしてそんなに気になるのか、自分でもわからなかった。

新しく作った水割りを男性客に差し出し、その横にいた男性客のグラスにビールを注ぐ。優希は親しみやすい笑顔を彼らに向けて、話しかけた。

「なにかお料理を取って参りませうか？ 何がお好きですか？」

「そうだな。適当に取ってきてよ」

「はい、かしこまりました」

優希は二枚の皿に料理を何種類か盛ると、彼らのところへ持つていった。

「うまそうだな。ありがとう。君もビールでもどう？」

もちろん、コンパニオンが酔っぱらうわけにはいかないが、ここで断ると、彼らの機嫌を損ねることになる。

「ありがとうございます。では、少しだけいただきます」

ボーイが運んでいたグラスをひとつもらうと、それにビールを注ぎ、彼らと乾杯する。優希はグラスに少し口をつけて、話しかけた。

「荻原さんって、ご友人が多い方なんですね。お誕生日にこんなに多くの方が駆けつけて、お祝いしてくださるなんて」

「そりゃあ、未来の荻原建設を背負って立つ男だからね。親の七光りだけじゃない。本人も経営者

になる自覚があつて、そういう努力をしている。本当にいい奴だよ」

少し酔っているせいか、彼は自分の友人のいいところを力説し始めた。優希はにこにこその話を聞き、相手をする。

ふと荻原を見ると、さつき優希とぶつかった男性と話をしていた。リラックスしたムードが漂はらっていて、二人は仕事の関係者ではなく、友人同士のようだった。きつと彼も荻原と同じ、いい家に生まれついた裕福なエリートなのだろう。このパーティーにはそんな男性が何人もいるようだった。優希が相手をしている客もまた、高級な仕立てのスーツを身に着けている。

つまり、上流階級の人達ばかりだ。優希は自分もそんな世界に属していたことを思い出した。過去を振り返っても仕方ないと思うものの、父が今も生きていたなら、そして、会社が倒産しなかったら、自分はどんな暮らしをしていたのだろうと考えるときがあつた。

今日の男女の比率は、男性のほうが圧倒的に多いが、女性客もそれなりにいる。彼女達は華やかなドレスを着こなしているから、きつとパーティー慣れしているのだろう。そんな女性の一人が、優希を侮辱ごぶしたあの男性に親しげな様子で話しかけているのが見えた。

優希は顔を背そむけた。自分に関係ない人だと思いながらも、妙に嫉妬しとめいた気持ちになるのが不思議でならない。

「わたし、ちよつと……失礼します」

優希は自分の不可解な感情と向き合いたくなくて、ホールを抜け出し、庭のほうへ向かった。風が火照ほった頬を冷やしていくうちに、なんとか気が落ち着いてきた。出会ったばかりの男性に、ど

うしてそんなに心を乱されるのか、よくわからなかった。いや、出会ったといっても、もう二度と会うこともないだろう。それに、あんな蔑みの眼差しで見られて、出会いもなにもない。

優希は落ち着いたところで、地下のホールに向かう階段を下りようとした。だが、そこですれ違った男の客に腕を掴まれた。彼はどうやら酔っぱらっているようだった。

「なんだ、一人で淋しいのか？ 俺が相手をしてやるよ」

彼は優希を抱き寄せようとした。

「わたし、仕事がありますので……。放してください」

優希は彼の腕の中でもがいたものの、酔っぱらいの力は強くて、なかなか逃れられない。

「いいじゃないか。なあ、優しくするよ。下ですとあんたを見てんだ。すぐくスタイルがいいよね。モデルでもやってる？」

自分が知らないうちに、また男に目をつけられていたのか。優希はそんなふうに見られていたことに、ぞっとした。

「やめてください。大きな声を出しますよ」

「出してみればいい。客に恥をかかせたって、仕事をクビになるかもよ。それでいいのかい？」

一瞬、黙ってしまったのは、腹が立ったからだだった。決してクビになるのが怖いわけではなかった。コンパニオンを派遣する会社なら、他にもある。それに、副業に必ずしもコンパニオンをしなければならないわけでもなかった。

けれども、その沈黙を、彼は承諾と見なしたようだった。いやらしい手つきで優希の身体をまさ

ぐりだした。

「やめて！ いやあっ……！」

こんな奴に触られたくない。いよいよ大声を出さなければと思ったとき、階段を上ってきた男性がいた。

「なにをしているんだ！」

男性は二人を見るなり、鋭い声で問い質した。すると、優希に抱きついていていた客は、慌ててぱつと手を離れた。

「ちよっと、ふざけただけだ。本当だって。……この娘、酔っぱらってるんじゃないかな。なんとかしてやってよ」

彼は言い訳をすると、ふらふらした足取りで地下のホールへ戻っていった。優希はいやらしい男の手から逃れられて、ほっとした。そして、礼を言おうと、助けてくれた男性を見た。

「君だったのか……！」

はっとして、その男性をよく見ると、それは優希とぶつかったあの男性だった。彼にとんでもないところを見られたと思い、頬が熱くなってきた。

「あの……助けていただいて、ありがとうございます」

「本当は邪魔だったんじゃないのかな？」

皮肉な調子で言われて、優希は一瞬ぼかんとした。自分が嫌がっていたことくらい、彼にはわかっていたはずだ。だから、すぐに止めに入ってくれたと思ったのに、そうではなかったのだろうか。



ていた優希の身体を押しやった。

「離れるんだ！」

そんなふうには激しい口調で言われて、優希は身体を離れた。優希を引き寄せたのも、唇を奪ったのも、彼のほうなのに。まるで、こちらから誘惑したかのように、彼は非難の眼差しを向けてきた。「君のその手には引つかからないぞ」

「だから、わたしはそんな手なんて使ってませんってば！ わたしはただ……」

「君の手は充分すぎるほどわかっている。裕福な暮らしをさせてくれる金持ちの愛人を探しているんだらう？ 君はその顔と身体で男を誘惑していくんだ」

冗談じゃないわ！ 言いがかりよ！

そう言いたいのは山々だったが、いくら真実を言ったところで、彼の耳には届かないのだ。彼はどれほど傲慢で嫌な男なのだろう。

こんな男にいくら説明したところで、同じことだ。彼は頑固で思い込みが激しく、決して自分の考えを曲げないだろう。

彼の目に映る自分は、淫らで狡猾な女なのだ。悲しくなったが、彼にそう思われたところで、大したことはない。どうせ、彼とももう会うこともない。

優希は気落ちしたところを彼には見せたくなかった。だから、顔を上げ、胸を張って、なんでもないふりをする。同時に、彼に自分のスタイルのよさをわざと見せつけた。

今までこんなことしたことなかったのに。

だが、自分を侮辱する彼に、なんとか一矢報いたかった。

「わたしが本当にお金持ちの男性とデートしたがついて話だけど……あなたなんか、いくらお金持ちでも、全然、対象外だわ」

彼の眉がぴくりと動き、眼光が鋭くなってくる。彼をなんとかして傷つけたかったのだが、自分の言葉がブーメランのように戻ってきて、優希を傷つけた。彼はずっと優希のことを気に食わず、軽蔑しているようだったが、今ので本格的に嫌われてしまったと思っただからだ。

だからといって、優希は彼のことを好きで、気を惹きたいというわけではない。ただ、彼の外見はとても素敵だった。それだけのことだ。格好いい男性に気に入られたいと思うのは、当たり前のことだ。

そう思いつつも、優希は今まで男性にどう思われようと気にしたことはなかった。だから、アイズドールと呼ばれるようになったのだ。

彼は眉を上げ、嘲るような笑みをその端正な顔に浮かべた。

「そのわりには、僕にキスされて、うっとりしていたようじゃないか」  
確かにそうだ。しかし、それは絶対に認めたくなかった。

「勝手にそう思っていればいいわ」

「まあ、どちらにしても、君とは関わりたくない。さっさと仕事に戻るんだな」

度重なる侮辱に、なにか言い返したい気分だったが、これ以上、なにを言っても、彼は決して傷つかないし、逆にこちらが苛々するだけだと悟った。それに、こんなふうな感情を露わにするのは、

自分らしくない。

そうよ。わたしはアイスドールよ。男なんかに感情をかき乱されたりしないの。本当はアイスドールではなかったが、今はなりきっていたかった。そうすれば、自分のプライドは救われるからだ。

「本当に、こんなことは時間の無駄だわ」

優希は彼に氷のような眼差しを向けると、ぷいと横を向いた。そして、彼に背を向け、階段を下りようとした。ところが、階段を上ってきた人物とぶつかりそうになって、脇に退く。そして、それがパーティーの主役である荻原であることに気づき、頬を染めた。パーティー会場である地下ホールにおらず、庭に出ているなんて、コンパニオンの仕事をせずに、サボっていると思われるかもしれない。

「あ、荻原さん……申し訳ありません」

「こんなところでどうしたんだ？」

叱るわけでもなく、荻原は柔らかい笑みを浮かべて、優希と男を見た。ここでなにをしていたのかと思っただろう。きつとなにか誤解されたに違いない。

「少し気分が悪くなつて、外の空気を吸うために出ただけです。もう、戻りますから」

「本当にそうかな」

荻原は友人である男のほうを見て尋ねた。彼は肩をすくめて、まるで脅かすような低い声で説明する。

「別に、彼女と僕とは関係ないよ。変に気を回さなくてくれ」

実際、彼とはなんの関係もなかったが、そんなふうに素っ気なく言われて、優希は傷ついた。

「そうか……。じゃあ、エスコートするから、一緒にホールに戻ろうか。……優希ちゃんだったかな？」

「え、名前を覚えていてくださったんですか？」

荻原にはコンパニオン全員で挨拶したので、まさか名前を覚えられているとは思わなかったのだ。もちろん、一人一人名乗ったものの、十人もの女性の名前と顔を覚えているわけがないと思っただけだ。

「美人には目がないんだ」

彼は優希の背中に手を回してきた。馴れ馴れしく触れられるのはあまり好きではなかったが、背後から焼けつくような視線を送ってくる男にあてつけるためだったら、なんでも我慢できた。もっとも、これが彼に対してあてつけになるかどうかは、よくわからなかったが。

どちらにしても、荻原はさっきの酔っ払いのように節度を欠いているわけではないし、彼の仕事はとても洗練されていて、不快感を覚えることはなかった。

二人で階段を下りながら、彼は優希にそつと尋ねてきた。

「さっき、なんだか言い争いをしていて声が聞こえたんだが、あいつになにか嫌なことでも言われたのかい？」

荻原は二人の声を聞いていたのだ。あの刺々しいやり取りを聞かれていたとは思わず、優希は恥

ずかしくなってしまうた。

「あの……わたしがあの人を誘惑してるって……」

「それで、君はそうじゃないと？」

「ええ。本当にそういうんじゃないんです」

優希はクリーニングの件を話して、今あったことも簡単に説明した。キスしたことだけは言わなかったが、それはわざわざ口に出すことでもない。もつとも、二人の会話が聞こえていたなら、もう知っているかもしれないが。

「あいつは警戒心が強いが、普段ならもつとスマートに女性を遠ざけるんだ。今夜はちよつと虫の居所が悪いのかもしれないな。嫌な思いをさせて悪かったね」

「そんな……。わたしこそ、荻原さんのお客様を不快にさせてしまったようで、申し訳ありません」  
自分はこのパーティーにおいては雇われた人間で、客でもなんでもないのだ。彼に謝られて、かえって恐縮してしまった。

「あいつとは昔からの付き合いだから、そんなに気を遣わなくてもいいんだ。仕事関係の人間なら、そうはいかないけど」

「あの方……仲のいいお友達なんですね」

地下のホールの入り口で、荻原は立ち止まり、優希の背中から手を離して、わざわざ顔を覗き込んできた。

「……気になる？」

彼はきらきらした目で自分を見つめている。きつとなにか勘違いしているのだ。優希がああ男性に気があるように思ったのだろう。

「いいえ。そんなこと……」

否定したものの、荻原はにやりと笑った。

「あいつの名前は高遠慎也。ホテル・ロマネーリのオーナーだよ」

「ホテル・ロマネーリ……」

都内にあるラグジュアリーホテルの名前だ。いや、都内どころか、世界中の主要都市にあるはずだ。そんな国際的なホテルのオーナーには、とても見えない。いくらなんでも若すぎる。荻原は擲揄っているんじゃないだろうか。

「ロマネーリは海外のホテルだと思っていましたよ」

「買収したんだ。父親が国内の有名ホテルのオーナーだったが、あいつはそれを国際的なホテルチェーンに化けさせた。タカトー・インターナショナルって聞いたことがあるかな？」

優希はあまり企業の名前に詳しくなかったものの、コンパニオンとしてパーティーに出たときに、何度か耳にしたことがある。

「その会社の社長なんですか？」

「代表取締役CEOだよ」

優希は小さく溜息をついた。自分とは住む世界が違う人なのだ。だから、コンパニオンごときにクリーニング代を支払うから連絡先を教えてくださいと言われて、警戒したのだろう。

「あの人があんな態度を取る理由がやっとわかりました」

彼は大金持ちであるだけではなく、超一流のビジネスマンなのだ。だから、彼には独特のオーラみたいなものがあったのだろう。優希が彼に惹かれたのは、きっとそのオーラのせいだ。そして、あの完璧な容姿のせい。

でも、住む世界が違うなら、彼には近づかないほうが賢明だわ。

近づこうとしたところで、彼にはもう嫌われているから、どうしようもないが。そもそも、二度と会う機会もないだろう。

荻原は微笑んで、優希の肩に手を置いた。

「そうだ。あいつは、女性にはいつも丁寧な態度で接している。今夜みたいに感情を剥き出しにしているところは、初めて見た」

「感情を剥き出しに……？」

「僕が君の背中に手を回したときの、あいつの顔ときたら……。怒りのあまり、今にも掴みかかってきそうだった」

優希は首をかしげた。どうして、彼が怒らなければならないのだろう。

「ああ、わたしが今度はあなたに目をつけたと思っただけですね。誘惑しようとしてるって。わたし、相当嫌われているみたいだわ」

真面目に言ったつもりだったが、何故だか荻原は噴き出した。

「嫌われてるって？ 本気でそう思っているんだ？」

「そうじゃなければ、あんなに突っかかってきたりしないとと思うんですけど」

荻原はまた笑った。

「そうだね。子供じゃあるまいしね」

彼がどうしてそんなに笑うのか、優希にはさっぱりわからなかった。そんなにおかしいことは言っていないつもりなのだが。

「どちらにしても、もう高遠さんとはお会いすることもないと思いますし、パーティーが終わるまで、仕事に専念します」

「ああ、じゃあ、頼むよ」

荻原はにっこり笑って、優希と別れた。優希は自分で宣言したとおりに、客に話しかけ、新しい飲み物を持ってきたりして、働いた。

同じお金持ちでも、荻原はとても感じのいい人だけど、高遠は違う。どんなに外見が素敵で、大金持ちだとしても、優しい男性のほうが好きだ。

しかし、付き合うわけではないのだ。そんなことを考えても仕方がない。

優希はなんとなく落ち着かない気分で、その夜を過ごす羽目になった。

仕事で疲れた身体を引きずって帰宅すると、アパートの明かりはすでに消えていた。母はもう寝ているのだろう。だが、そのほうがいい。母は優希のすることなすこと、すべて気に入らず、文句ばかり言う。今日は本当に疲れていたし、母の小言など聞きたくなかった。



なるべく物音がしないようにドアを開け、鍵をかける。部屋の明かりをつけて、優希はバスルームに向かおうとした。

そのとき、母が寝ている部屋の襖が開いた。

「やっと帰ってきたのね」

優希は振り返り、笑顔を見せた。

「ただいま。遅くなってごめんなさい。もう寝てるかと思っただけ……」

「寝ていたけど、音がしたから目が覚めたのよ。まったく……何時だと思ってるの？」

母は不機嫌な顔で突き放すように言った。母はいつもそうなのだ。こちらが愛想よくしても、それが当たり前だと思っっている。

「仕事していたのよ。言っただけでしょう？ 今日……」

「パーティーなんでしょ？ そんなの、仕事の内に入らないわよ」

確かにパーティーには行くが、楽しんでるわけではない。コンパニオンという仕事を説明したのだが、母は理解してくれてないようだった。副業を始めて、もう二年にもなるのに、未だにパーティーに出かけることを、遊びにいくと思っっているらしかった。

「とにかく、仕事だったの。これで、いくら稼げるんだから」

「どうせなら、もっと割のいい仕事にすればいいのよ。あなたはパーティーで楽しいかもしれないけど、わたしはずっとこの狭くて汚いアパートに閉じ込められているんですからね」

別に閉じ込めているわけではないから、勝手に出かければいいのだが、母は自分で楽しみを見つ

けられない人なのだ。昔は買い物に出かけるのが趣味だった。ブランドショップへ行き、高価な買い物をして、友人と豪華なランチを楽しむ。今はもちろんそんな楽しみがなくなってしまったから、出かけないのだ。

「毎月お小遣いをあげてるんだから、その分は自由に遣って構わないのよ」

母は侮辱されたような顔で、口元を引き締めた。

「まあ、あんな金額で何が買えるって言うの？ 季節は変わったっていうのに、わたしは服の一件も買えないわ。昔はお父さんがカードをくれて、いくら遣ってもよかったのに」

そんな愚痴を聞かされても、優希にはどうすることもできなかった。実際、お金はないし、優希がそんなに稼げるわけもなく、母も働かないのだから。

だいたい、服も買えないと言われたが、ろくに外に出ないのだから、服なんてそれほど必要はないはずだ。それに、高価なものでなければ、服をやるだけのお金は渡している。それでも気に食わないと言うのなら、仕方ない。

優希だって、新しい服なんて買えないのだ。というより、服のことは考えないようにしている。まず食料品と生活必需品が大切だ。生きていくために、これでも必死で働いている。

夜の仕事をメインにすることも考えた。しかし水商売はお金を稼げるかもしれないが、安定性はない。やはり事務の仕事を中心に、副業で稼ぐようにしたかった。だが、コンパニオンの仕事はあまり増やしたくない。何故なら、優希は仕事に必要な資格を取りたいと考えていたからだ。

そのために勉強をしなくてはならない。それに、母がやりたがらない家事もする必要がある。パー

ティーにばかり出かけているわけにはいかなかった。

母がせめて家事をすべてしてくれたら……

そう思わないでもなかったが、母は家事をすることを拒否している。家政婦がいて、何人も手伝いの女性がいた暮らしのことがまだ忘れられないのだ。どうして、自分がしなくてはならないのかと思っているのだろうか。

もう、うちはお金持ちなんかじゃないのに。

優希は母が昔の暮らしを懐かしみ、しがみついているのが悲しかった。考えを切り替えて、暮らしも変えなくてはならないのに、母はどうしてもそうしかなかった。現実を見たくないのだ。

せめて兄が生活を支えてくれたらよかったのだが、その兄もまた現実的ではなかった。母も兄も、まだ夢を見ている。父が作り出した幻の夢を。

いっそ、優希は自分も夢を見ていたかった。けれども、そうはいかない。生きていくためには食べなくてはいけないし、こんな狭いアパートでも、家賃を払わなくては路頭に迷うだけだ。さすがにホームレスにはなりたくない。きちんと仕事をして、きちんと生活を営むこと。それが、社会人として必要なことなのだ。

「とにかく、わたしは疲れたから、お風呂に入るわ」

「お湯は入れてないわよ。だって、掃除もしてなかったじゃないの」

そういえば、朝は寝坊して、風呂掃除ができなかったのだ。母はお湯を溜めることくらいはするが、断固として掃除はしてくれない。

「じゃあ、いいわ。シャワーにするから」

シャワーで済ますには、もう寒い時期だが、仕方がない。今から掃除をして、お湯を溜める気にはなれなかった。

「あまり音を立てないようにしてちょうだいね。眠れないから」

母の刺々しい声に、優希は黙って頷いた。

## 2

萩原邸でのパーティーから、三週間ほど経った日のことだった。

今日は理沙子の車に乗せてもらい、企業のレセプションパーティーが行われるホテルに向かった。今日の衣装は色鮮やかなイブニングドレスだ。コンパニオンはそれぞれ同じ形のシンプルなドレスを着るが、一人ずつ色が違う。優希に与えられたドレスは緋色だった。

「アイスドールにはそぐわない色ね。でも、優希は赤が似合うから」

そう言う理沙子はパールホワイトのドレスを着ている。

「こういうドレスを着られるところが、この仕事のメリットのひとつよね。着物とか、窮屈な衣装のときもあるけど」

理沙子はそう言うが、優希は自分で着付けができるようになっていた。美容院に頼んでしまうと、

当たり前の話だが、料金を取られる。それが嫌なばかりに、着物をレンタルして自分で特訓したのだ。髪形をセットするのも、メイクもすべて自分でやるようにしている。

控室で手早くヘアメイクをやってしまう優希を見て、理沙子は感心したように言う。

「それにしても、優希は器用よね。ひよつとしたら、そういうのを仕事にしたらいいかもしれないわね」

鏡の中の自分の顔を見て、そういう選択肢もあったのかと思う。将来のためのスキルアップのことも、事務の仕事を考えていたため、そういった系統の資格を取ることしか頭になかった。

「でも、わたしはやっぱ安定した仕事がいいから……」

もちろん、公務員でもなければ、一般の会社では倒産の危機というものがある。どの仕事も確実ではない。しかし、やはり着付けやヘアメイクより、事務の資格のほうが安定性において勝っているような気がするのだ。

「わたしって、面白くない人間よね」

「わたしが優希みたいなスタイルや容姿だったら、グラビアモデルかなにかになっていたわよ。そういう意味では、もつたないって思うけど、優希はそういう性格じゃないものね」

優希は肩をすくめた。ドレスを着るのはいいが、人前で水着姿を披露したいとは思わない。それに、できれば目立ちたくなかった。スタイルがいいと褒められるのは嬉しいが、見知らぬ男にじろじろ見られるのは、嬉しくない。

好きな人に見られるのなら、それもいいかもしれないけど。

優希の脳裏に浮かんだのは、高遠の顔だった。

どうして、あんな人のことを思い出したりするのよ。

頭に浮かんだ彼を、優希はすぐに打ち消した。あんな人なんか好きになるわけがない。初めてのキスの相手が、あの男だったなんて思い出したくなかった。

容姿は申し分なかったが、キスは好きな人とするものだ。少なくとも、優希はそう思っていた。

好きな男は今までいなかったのだが、それでもそう思い込んでいたのだ。

好きな人。そして、結婚する相手。

自分はかなり時代遅れな人間かもしれない。けれども、やはり自分を大事にしたい。父や兄のように女性を弄ぶ男は世の中にいくらだっているに違いないからだ。自分はそんな男に引かかって人生を台無しにしたくない。父の浮気のせいで、今まで自分の人生は振り回されてきた。だが、これからは自分で計画したとおりに生きていこうと思っていた。

今はまだ好きな人に巡り合えなくてもいい。結婚は二十七、八歳くらいでしよう。それまでに、働きながら資格を取り、それからその資格で転職するつもりだった。いつまでも、遠縁の社長に頼り切りではないかと思うからだ。

とにかく、今は男など不要だ。だから、衝動的な行動は慎もう。やはり、自分は地味でも安定した生き方をしていきたい。

優希は支度を終えると、みんなと一緒に会場へ向かった。

会場に足を踏み入れて、イベントスタッフと軽い打ち合わせをした。そして、いつものように出入り口に並んで、招待客を迎え入れる。

優希は微笑み（ほほえ）を浮かべ、客に飲み物のグラスを渡していく。様々な人がいるが、ビジネスマンが多い。それも、いいスーツを着ている男性が多くて、優希はなんだか嫌な予感がした。

「ああ、優希ちゃん……だったね？」

親しげに声をかけてきた客は、萩原だった。優希の顔は一瞬引きつったが、無理やりにつこりと笑って、乾杯用のビールのグラスを手渡す。

「萩原さん……。またお会いできるなんて」

「驚いたみたいだね。よかつたら、後でゆっくり話そうよ」

「はい、よろしくお願います」

萩原は会場の奥へ入っていく。彼と再会するのは構わない。彼は自分の心を乱す相手ではないからだ。

優希は感情を表わさないようにしていたし、誰にも自分の心のうちを見せたいとは思っていなかった。だからこそ、顔を見ただけで、言葉を交わしただけで感情をかき乱される相手が嫌だった。

ふと、優希は自分が見られているような気がして、会場の出入り口に目を向けた。

そこにいたのは、高遠だった。彼は全身から傲慢（ごうまん）な雰囲気を出していて、優希を睨（にら）みつけていた。彼はつかつかと優希の前にやってきて、足を止めた。

「君がこんなところにいるとはな」

「わたしはコンパニオンですから」

優希は作り笑いをして、グラスを差し出した。これは確かに副業だけれど、プロはプロだ。どんなときでも愛想よく微笑むことくらいできる。

「君はパーティーに出るとは、獲物を捕まえて帰るんだろうな」

優希が男を誘惑する達人だと、彼はまだ誤解しているのだ。ここでもまた嫌味を聞かされるのかと思うと、気持ちが悪くなってくる。できれば、楽しく仕事がしたいものだが。

「なんのことでしょう。わたしはお客様にパーティーを楽しんでもらうために、仕事をしているだけですから」

いくらそう言ったところで、彼は信じないのだろう。案の定、軽蔑（けいべつ）したような目で見られて、優希は思わず溜息をつきそうになった。だが、思い直して、にっこりと笑いかけた。

「どうぞ今日は楽しんでくださいね」

「ああ、君に言われなくても楽しむさ」

高遠は優希に背を向けると、会場の人込みに消えていった。

いつまでも、あんな人に構ってられない。優希は気を取り直して、新しい客に微笑みかけた。

乾杯が終わり、出席者が料理を食べながら談笑を始めた。優希は飲み物の世話をし、料理を取り分ける手伝いをして、忙しくしていた。

そのうち、料理がなくなってくると、優希は出席者の会話に加わったりもした。不意に、優希は

肩を叩かれて、振り向いた。

「萩原さん！」

「意外とコンパニオン業界は狭いのかな。パーティーに出れば、また会えるんじゃないかとは思っていたが、ずいぶん早く会えたね」

「本当に。派遣されるコンパニオンなんて、たくさんいるのに、奇遇ですね」

ついでに、コンパニオンを派遣する会社もたくさんある。偶然に違いないのだが、優希はなんとなく落ち着かなかった。

視線を感じるからだ。それも、かなり強い視線を。

優希はちらりと目をやり、その視線の持ち主を探した。そして、すぐに見つけた。高遠がグラスを持ったまま、こちらをじつと睨みつけていた。彼の隣には美しい女性客がいて、彼の関心を引こうと懸命に話しかけているというのに。

あの女性は誰かしら。彼の知り合いかしら。それとも……

いろいろ妄想してしまう自分が情けない。彼の思い込みを馬鹿にできないではないか。それに、彼があたの女性と付き合っていたとしても、自分にはなんの関係もない。いや、なんの関心もない。

そう思いながらも、なぜだか気になってしまう。彼があんなにこちらを睨まなければ、自分も気にしないのに。

ちらちらと高遠のほうに目をやる優希に気づき、萩原は笑った。

「やっぱり、あいつが気になるんだね？」

「あつちがわたしを見てくるからです。高遠さんでしたっけ。あの方、わたしのことがよほどお嫌いなんです」

「でも、嫌々も好きのうちって言うじゃない。あいつは君のことが気になって仕方ないんだと思うね」

自分にはそうは思えない。好きな相手に、嫌味を言ったり、睨みつけたりする理由がわからなかった。女性を口説くのに、そんな方法を取る男がいるだろうか。いや、もちろん、自分は彼に口説かれているとは思わないが。

でも、彼はキスをしたわ……

彼は嫌いな相手とキスしても平気なのかもしれない。だが、優希はそうではなかった。好きな人とだけしたいのに、彼に奪われてしまったのだ。いくら彼がパーティーの客でも、あんなことを気軽にしているはずがなかった。

セクハラみたいなものじゃないの。でも、彼はひよつとしたら酔っ払っていたのかもしれないわ。いくら考えても、彼の行動の意味は、優希にはわからなかった。だったら、もう、考えるのはやめよう。自分の仕事はパーティーの客を楽しませることだ。

優希は萩原につこりと笑いかけた。

「萩原さんはきつと女性にモテるんでしょうね」

「そう思う？ 意外とダメなんだよ。僕って、押しが弱いから」

「嘘ばっかり。そんなふうには見えませんよ」

「肝心なときに尻込みするんだ。相手の心がけっこう読めてしまうものだから。自分に気がないのがわかってるのに、わざわざ誘ったりしない」

確かに、荻原は他の男性とは少し違っている。エリートは自信のある人が多くて、アルコールが入ると、謙虚さがなくなるものだが、彼は違う。心が読めるというからには、けっこう周りに気を遣う性格なのかもしれない。

「荻原さんは優しいんですね。優しい男性はもつとモテてもいいのに」

「ああ、君もそう思うだろう？ 僕もそう願っているんだけどね」

彼は会長の息子で、会社でも重要なポストにいるはずだ。そして、なかなかの容姿の持ち主であることを考えると、彼がモテないはずはなかった。だが、彼は単に女性にモテればいいとは思っていないのかもしれない。きつとすでに本命の相手がいって、彼女だけが欲しいのだろう。

お金持ちの息子には、つい偏見へんけんを持ちたくなるが、荻原に関して言えば、その偏見は間違っているのかもしれない。それならば、高遠の場合はどうなのだろうか。彼は甘やかされたお坊っちゃんではないのか。

優希はまた彼のほうに目を向けた。すると、彼もこちらを見ている。しばし目が合った。火花が散るとは、こういうことを言うのだろうか。二人はしばらく睨にらみ合っていた。だが、高遠は隣にいる女性になにか伝え、まっすぐにこちらへ歩いてきた。

なんだかドキドキしてくる。優希は頭の中がふわふわしてくるのを感じた。

高遠は優希の前にやってきて、厳しい眼差しまなざしを向けた。

「僕の友人を誘惑するのはやめるんだ」

優希は彼の命令口調にムツとした。

「誘惑なんかしてません」

「いや、している。君の手管てくだはわかっている」

彼はどうしても優希をそんなふうに思いたがっているようだった。優希にしても、彼と会うと、なぜだか心が乱されてしまう。今までだって、理不尽なことを言ってくる客はいた。その度たびにクルルに対処してきたのに、彼とはいつも口論になるのだ。

自分がこれほど感情的になることもめずらしい。彼と会う度に、自分が自分でなくなるようだった。

「じゃあ、伺いますが、わたしがどんな手管を使っているとおっしゃるんですか？」

「そうやって、にこにこ笑って、相手に馴れ馴れしくすることだ」

それが手管だと言うなら、コンパニオンはみんな誘惑していることになってしまう。いや、コンパニオンだけではない。彼の論理だと、多くの女性が男を誘惑していることになるのではないだろうか。

「わたしはただ仕事をしているだけです。コンパニオンが黙って、不機嫌な顔をしていたら、仕事になりません」

「君の度が過ぎているんじゃないか？」

「どの辺りが？ わたしはごく真つ当な仕事をしているだけです。全部、全部、あなたの思い込みですから！」

あまりにしつこく食い下がってくるので、思わず語気を強めてしまう。客と言い争いをしてはいけないと思うのだが、どうにも気持ち収まらない。

「君達を見てると、面白いね」

萩原は呑気そうに横から声をかけてきた。

「どこが面白いんだ？　というより、おまえは彼女と親しいのか？」

高遠は萩原にまで文句を言い始めた。

「彼女、優希ちゃんっていう名前らしいよ」

「優希……ちゃん？」

なぜだか冷たい目で睨まれて、優希は更にムツとする。

「森谷優希です。でも、別にあなたに名前を覚えてもらおうとは思いません。ただのコンパニオンですから」

「本当は覚えてもらいたいのだろうか？　萩原には教えていたわけだし」

「萩原さんはこの間のパーティーの主役ですから、ご挨拶ただけです。でも、コンパニオン全員で挨拶したから、覚えていてくださっているとは思わなくて」

「美人の名前だったら覚えるって言ったよね？」

萩原はにっこり笑った。まるで口説き文句のようなことを言うが、優希には彼があまり本気で言っているようには聞こえなかった。恐らく冗談だろう。

高遠は笑っている萩原を睨みつけた。

「彼女に気を許していると、気がついたら、婚約する羽目になっているかもしれないぞ」

「婚約？　いや、いくらなんでも飛躍しすぎだ。落ち着けよ」

「やにやと笑っている萩原を押しつけるようにして、高遠は優希の手をぎゅっと握ってきた。

「えっ……あの……」

「いいから、こっちへ来るんだ。話がある」

彼は優希の手を掴んだまま、会場の外へ向かっている。優希は慌てて手を振り払った。

「わたし、仕事ですよ！　勝手に持ち場を離れるわけにはいきません！」

「仕事だつて？　君はちゃらちゃらして、萩原の気を惹こうとしていた」

「ですから、何度説明したら、納得していただけるんです？　わたしは誰にも興味はないし、気を惹こうともしていません」

高遠は腕組みをして、じろじろと優希の全身を眺めた。優希はあまり物事に動揺しないほうだったが、彼のあまりにもぶしつけな視線に頬がさつと赤くなった。

誰にも興味はないと言ったが、高遠のことは気になっている。だが、それは彼がしつこく嫌味を言ってくるせいだ。そうでなければ、これほど彼のことが気になるはずがない。

「君は全身で男の気を惹いているよ。間違いない」

優希は溜息をついた。思い込みが激しい彼にそう見えてしまうのは、もう仕方のないことかもしれない。

「だったら、わかりました。誘惑してるってことでもいいです。あなたにもあなたのお友達にも、

近づきません。それでいいですか？」

これで、彼が納得してくれればいいのだが。自分はちゃんと時給分の働きをしなくてはならない。彼にいつまでも邪魔されては、困るのだ。

「いやに、あっさり認めるんだな」

高遠がつまらなさそうに言うから、優希は呆れてしまった。彼の思い込みを肯定してあげたのに、彼はまだ不満なのだ。優希には彼がなにをしたいのか、さっぱりわからなかった。

「とにかく、そういうことです。わたしは自分の仕事をしますね」

優希はさっと彼に背中を向けると、手持ち無沙汰に立っている人のところへ行き、話しかけた。

「お食事はお済みでしたら、デザートがあります。甘いものはお好きですか？」

優希はその後も自分の仕事を懸命にした。テーブルの上の皿やグラスをてきぱきと片付け、客が飲み物を欲しがったら、カウンターまで取りにいった。

やがて、客が帰り始める。優希はほかのコンパニオンと共に、出入り口に立ち、にこにこしながらお土産の袋を手渡した。

萩原は会場から出ていくときに、優希に微笑みかけた。彼は愛想がよすぎるかもしれないが、悪い人ではないし、軽い人でもないように思える。しかし、高遠が邪推したように、優希は男性として彼に興味があるわけでは決してなかった。

逆に、高遠は優希を無視して、会場を出ていった。きつとまた睨まれると思っていたので、拍子抜けした。少しだけ淋しいと思ってしまった自分を戒める。彼がうるさくつきまとってきたのは、

別に優希のことが気になるからではなく、なにか誤解していたからだった。無視されたということ、は、もう誤解も解けたのだろう。

だから、これは喜ばしいことなのだ。もし万が一、またパーティーで顔を合わせることがあったとしても、絡まれずに済む。

もっとも、また会うことなんてなさそうだ。彼とは住む世界が違うのだ。

優希は自分が気落ちしていることを認めたくなかった。これでは、まるで彼のが好きだったみたいだ。そんなはずはない。外見はともかく、あれほど嫌な男に出会ったのは、生まれて初めてだ。仕事が終わわり、優希はほかのコンパニオンと共に、会場を出て、控室へ向かった。高遠と会わなければ、ただのいつもの仕事でしかなかったが、今日は散々な目に遭ったような気がしていた。

控室で地味なスーツに着替え、髪を後ろで結わえて、メイクを落とすと、すっきりした。やっと自分に戻れたという感じがするのだ。

後ろから理沙子が声をかけてくる。

「帰りも送ってあげようか。どうせ通り道だし」

「本当？ だったら、甘えちゃおうかな。今日はすごく疲れてしまつて……」

「優希に言い寄ってた人のことでしょうか？ 名刺、もらった？」

理沙子は高遠が優希に言い寄っていたと思つているのだ。彼女の勘違いだが、なんと説明すればいいだろう。彼の言い分では、優希のほうが言い寄つていることになっていろいろらしいが、説明するのもずいぶん馬鹿馬鹿しい話だ。



「あれは、そういうんじゃないのよ。言い寄られてたわけじゃ……」

控室のドアを開いた優希は口を開けたまま、言葉が出てこなくなった。高遠が廊下の壁に寄りかかり、腕を組み、自分をじっと見つめていたからだ。

彼の視線に晒されて、なぜだか身体が火照ってくる。睨みつけるような眼差しではなかったからかもしれない。彼は優希の普段の格好を見て、驚いているようだった。

二人がじっと見つめ合っていると、理沙子が笑いながら声をかけてきた。

「なんだ、待っててくれてたんだ？ やだなあ、優希。デートならデートだって、正直に言ってくれなきゃ」

「えっ、そうじゃないのよ。デートなんて……」

「いいから。じゃあ、またね」

理沙子はそそくさと立ち去ってしまった。優希は一人取り残されて、困惑していた。高遠は自分を見ているが、もちろんデートの約束などしていない。彼はほかの用事でここに立っているのだろう。

そう思ったものの、彼はゆっくりと壁から離れて、こちらに近寄ってきた。

「家まで送ってやるう」

「えっ……あなたが？」

どうして、彼が送ってくれるのだろうか。優希は驚いて、ぽかんと彼の顔を見つめた。彼は不機嫌そうに顎に力を入れている。そんな親切なことをしようという顔ではない。だとしたら、今、自分が聞いた言葉はなにかの間違いなのだろうか。

「運転手がいる。僕はアルコールを飲んでるんだ。運転はしない」

そんなことを訊いたわけではないのだが。彼はいつも優希の言葉を誤解する癖があるようだった。とはいえ、どうやら、彼は本気で優希を送ろうと申し出てくれているらしい。

優希は迷った。

彼にこれ以上、つきまとわれたくないという気持ちと、彼とまだ話していたい気持ちがあつて、揺れ動いてしまう。それに、彼のほうが優希を遠ざけようとしていたはずなのに、どうして一緒に車の乗ろうという気になったのか、わからなかった。

いや、彼の気持ちは、一から十まですべて謎だらけだ。

「あなたのほうがわたしを誘惑するというわけ？」

思わずそう訊いてしまって、優希は後悔した。どうして、彼とは喧嘩せずに、穏やかに話せないのだろうか。本当のところ、彼と言い合いをするのは疲れてきたというのに。

高遠は肩をすくめた。

「そうだ。誘惑……しているのかもしれないな、結局」

彼があっさり認めたので、優希は驚いた。今までとても頑固だった人が、急にこんなに素直な気持ちで語るようになるとは、とても思えなかったからだ。

これはなにかの罠かしらね……

だが、罠でもいいような気がしてきた。閉じこもっていたところで、いいことはなにもない。結局のところ、優希のほうも彼のことが気になって仕方がないのだ。きっと、彼も同じような気持ち

なのだろう。優希のことを軽蔑しているくせに、話してみたいと思っ  
ているに違いない。

「本当は違うことを言いに来たんだが、今の君を見ると、なんだかどうでもいいような気がしてきて……」

彼は優希の頭から爪先まで眺め回した。

「ずいぶん違うから、別人と思っただんじやないかしら」

「いや、それはないが。だが、そんな姿で出てくるとは思わなかった」

彼を驚かせるつもりだったわけではないが、優希は燻<sup>くす</sup>っていた気持ちがあつた。普段の自分がどれほど地味な存在か、知らせることができたからだ。自分が男性を誘惑したりしないということ、彼にはわかってもらいたかった。

もちろん、わかってもらったところで、自分と彼の関係はなにも変わったりしない。それはちゃんと理解している。変な期待は抱いたりしない。

「がっかりしたかしら。あなたが持つているわたしのイメージは最悪みだだから」

「今の君は悪くない」

『悪くない』と『いい』の間にはずいぶん差がある。だが、まるで褒め言葉のように聞こえてきて、優希は頬を赤らめた。同時に、大して褒められたわけでもないのに、すぐにその気になる自分が哀しくなる。

「だから……一緒にいこう」

彼の声はとても優しいに聞こえた。だから、優希も反射的に頷<sup>うなづ</sup>いてしまった。

我に返ったときには、優希は肩に手を回されて、彼と歩いていた。なんという早業<sup>はやわざ</sup>だろう。彼のほうこそ、女性を誘惑するのに慣れていないに違いない。

彼と距離を置くべきだと思う冷静な自分がある。しかし、このまま彼とずっと一緒にいたいと願う、夢見がちな自分も片隅<sup>すみ</sup>にいた。

ロビーからエントランスに向かうと、そこに待っていたのは見るからに高級車だった。運転手が恭<sup>こうやう</sup>しく一礼して、後部座席のドアを開ける。優希が彼と一緒にそこに乗り込むと、運転手がドアを閉めた。

彼のお抱え運転手というわけだ。ホテル・ロマネーリのオーナーなら、驚くほどのことはないだろう。だが、そういうことを口に出すと、また裕福な男を漁<sup>う</sup>っていると言われかねないので、黙っておく。

彼の傍<sup>そば</sup>にいと、妙に感情的になっていた優希だったが、彼が敵意を見せていないときは自分も冷静でいられるようだ。やっといつもの自分を取り戻せたようで、ほっとする。

「出してくれ」

高遠が静かな声で運転手に言うと、車が動き出した。

「あ、わたしの住所は……」

アパートの場所を伝えると、高遠は頷いた。

「帰る前に、一杯だけ飲まないか？」

断ろうと思った。彼と親しくする義理はないからだ。それに、今は優しい調子で話しかけてくれ

るが、また侮辱おごりされるかもしれない。それは嫌だった。

けれども、彼に手を握られて、なにも言えなくなる。身体がカッと熱くなってきて、頬もきつと真つ赤になっっているはずだ。

コンパニオンをしていれば、酔った客に手を握られることなど、よくある。だが、今まで自分の身体がこんなふうになったことはなかった。

彼の大きな手が自分の手を包んでいる。ふと目をやると、彼の指はとても長かった。男性の手にしては、とても綺麗だ。

心臓がドキドキしてきた。落ち着かなくてはいけないと思うのに、訳のわからない衝動とつらの虜とらになっ  
てしまいそうな気がして、どうしていいかわからなかった。

「……いいだろう?」

誘惑されるように囁ささやかれると、優希は彼に従うしかなかった。

「じゃ、じゃあ、一杯だけ……」

乾いた声でそう答えると、高遠はふつと笑った。

「コンパニオンをしているときとは違って、ずいぶん従順なんだな」

その言葉は侮辱されているように受け取れる。だが、彼にその意図がないのは、話し方でわかった。「あなたが突つかかかってこなければ、わたしだって、おとなしくしてるわ。普段はもつと冷静なのよ」

「君は普段いつもこういう格好かっこうをしているのか? パーティーでは派手に見えるのに」

「わたしは地味よ。仕事だって、小さな会社で事務や雑用をしているの。この服はその仕事用なの。

コンパニオンは副業で……派手に見えるのは、メイクやドレスのせいじゃないかしら」

それとも、スタイルがいいと言われるからだろうか。ドレスを着て、パーティー用のヘアメイクをすると、何故か目立ってしまうのだ。だが、そんなものは仮初かみそめの姿だ。いつもの自分が一番落ち着く。

「服装や化粧で、女性の印象が変わることは知っているが……。君は百八十度変わってしまう」

彼はどちらがいいと思っっているのだろう。いや、考えるまでもなくはつきりしている。彼はこの地味な優希のほうがいいのだ。だから、一杯飲もうと誘ったり、手を握ったりしているに違いない。派手な優希のほうは、彼に睨にらまれるばかりだったのだから。

でも、キスしたのは、派手な優希のほうだったわ……

急に彼とキスしたことを思い出して、一気に緊張してきた。そして、その彼と二人で親密そうに寄り添っっているということに、ドキドキしてくる。運転手がいて二人きりではないが、車の中は薄暗いから、二人きりでいるような気分になってくるのだ。

「こんなに髪が長いと思わなかったな」

彼は手を離すと、優希の髪に触れてきた。そして、うしろで束ねているゴムを取り去る。すると、背中に豊かな黒髪が広がった。

「綺麗な髪だ……」

彼は髪の毛を手で梳すきながら、囁いた。

「暗いから、綺麗かどうかかわからないでしょう?」

「手触りでわかる」

自分の髪の手触りを彼が楽しんでいる。そう思うと、触れられていることに、心地よさを感じてしまう。恐らく嫌いな男性にこんなふうに触れられたら、すぐに拒絶したことだろう。

それなら、わたしは彼が好きなの……？

そんなつもりはなかった。彼なんか好きじゃない。そう思ってみても、自分の身体は彼を好ましい人物として反応しているようだった。

いつしか彼の手は髪ではなく、優希の背中をゆつくりと撫でていた。そして、その手が上がっていき、うなじに触れられる。

今までにないくらい、身体が熱くなってくる。優希は自分の身体が制御できなくて、驚いていた。自分の身体が自分のものではないみたいだ。

「そんなに緊張しなくていい。身体のを抜いて」

緊張は、彼にも伝わっていたのだ。それなら、こんなに身体が熱くなっていることも、心臓がドキドキしていることも、伝わっているのだろうか。

「わ、わたし……」

男性にこんなふうに触れられるのは初めてだと言おうとして、口を噤んだ。嘘をついていると責められそうな気がしたからだ。

彼は自分を誘惑する女だと思っていた。だが、今はどう思っているのだろうか。地味な姿を見て、考えを変えたのだろうか。だから、誘ってくれたのかもしれない。

でも、そうじゃなかったら……？

高遠がいきなり態度を変えてきた理由が、やはりわからない。刺々しくない彼とこうして話をするのは、外見が好みであるだけに、嬉しくないと言えば嘘になる。こんなにドキドキしているのだから、本当は彼に惹かれているのだ。

しかし、彼のほうはどうなのだろう。自分を試しているのかもしれないとも、思ってしまふ。こうして優しくしてやれば、すぐに引つかかる女だと証明したいのかもしれないなどと考えてしまふのだ。

優希の頭の中には、こうした疑惑とは逆に、彼を信じたい気持ちが渦巻いていた。

彼の手はさり気なく肩のほうへ移動していた。そして、自分のほうに優希の身体を引き寄せる。

密着する彼から、爽やかな男性用コロンがほのかに漂ってきた。その香りに、優希は最後の理性まで剥ぎ取られていくようで、眩暈がした。

なにか話さなくてはいけない。会話をして、彼をなるべく遠ざけなければいけない。

そう思うのに、なにも喋れなくなってくる。催眠術か魔法にかかったみたいに、頭が働かなくなる。ただ、彼に身を預けて、安らいでいたい気持ちになっってくるのだ。

安らぐ……？ いいえ、安らぐどころか……

さつきから、彼にされたキスのことばかりが頭に浮かんでいる。もう三週間前のことだから、忘れたと思うっていたのに。いや、忘れようと努力していたが、結局、忘れられなかったのだ。そして、今になって、あのことが頭に何度も甦ってくる。

彼の唇の感触や、蕩けるような舌の動きを思い出し、身体がゾクツとしてきた。またキスされたい。

優希はそんなふうに思ってしまった自分が恥ずかしかった。これでは、発情した雌猫かなにかのようだ。自分を駆り立てているものが、単なる身体の衝動なのか、それとも頭の中の妄想によるものなのか、もうわからなくなってくる。

一体、わたしはどうなってしまったの……？

「あまり考え込まなくていい」

高遠はまるで優希の心を読んだかのように囁いた。そんなふうに囁かれると、ますますドキドキしてくるのだが、だからといって離れて話したら、自分達の会話が運転手に筒抜けになってしまう。それはそれで嫌だった。

「か、考え込むって？」

「僕のことを意識しているんだろう？ だったら、もう悩まなくていい」

なんて自惚れが強い性格なのだろうと思っただが、実際、彼には自分の気持ちはばれてしまっているに違いない。確かに自分は意識している。否定したいが、今は強く出られない。パーティーのときは、あんなに強気でいられたのに、不思議でならなかった。

彼こそ、誘惑に慣れているのだ。今まで何度もこうして女性を車に乗せ、甘い言葉をかけてきたに違いない。誰だって、彼のような存在感のある男性に言い寄られたら、ふらふらとその気になってしまっだろう。

彼にしてみれば、優希を引っかけることなんて、簡単だったのだ。

「わたしがなにに悩んでいるのか、なにを考えているのか、あなたにわかるの？」

優希はなんとか言葉を返した。本当は辛辣に言いたかったのだが、残念ながら掠れたような声しか出なかった。

「僕にどんな態度を取ろうか、悩んでいる。……といったところだな」

当たり前だ。しかし、それを認めたくなかった。

「だって、あなたの態度が変わってしまったから……。そんなふうに変わる理由はなんなのかって思うのよ」

「もちろん理由はいくつもある。それは後で教えてあげよう」

いくつか理由があったと聞いて、彼はただの気まぐれで待ち伏せしていたわけではないことがわかった。

「後で、なの？」

「そう。後で……。約束するよ」

彼はそう言って、優希の髪の一束を指でつまむと、そこに軽くキスをした。

ドキンとして、身体が震える。

彼は自信ありげに笑った。誘惑していると何度も非難されたが、そんな彼が今度は明らかに自分をターゲットにして、誘惑している。

ああ、もう訳がわからない……！